悠久の名作シリーズ（15）

中国明時代の詩人

『花月吟』唐伯虎

花と月と吟を楽しむ

花月吟　唐伯虎

有花無月恨茫茫　花有り月無ければ恨み茫茫
有月無花恨轉長　月有り花無ければ恨み転長し
花美似人臨月鏡　花美人に似て月鏡に臨み
月明如水照花香　月明水の如く花香を照す
扶笻月下尋花歩　杖に扶けられて月下花を尋ねて歩み
携酒花前對月嘗　酒を携えて花前月に対して嘗む
如此好花如此月　此の如き好花此の如き月
莫將花月作尋常　花月を将て尋常と作す莫れ

花月吟　唐伯虎

【語句の意味】

恨　気が抜けてもの足りない
茫茫　ぼんやりしたようす
転　いよいよ　さらに
笻　杖　この場合、中国の竹で節が高く中が詰まっている竹の杖
嘗　なめる　ここでは酒を飲む
尋常　つね　なみ　ここではいつまでも
莫　・・・してはいけない

【意　解】

花が咲き（そこに月が出ていれば一層よい感じがするのであるが）もし月がでていなければ、なんとなくぼんやりと気が抜けた感じがして物足りなく思う。また月が出ていても、花が咲いていなければ更に恨みを長くひくのである。

（今夜は花も咲き月も出て）美しい花はちょうど美人が鏡に向かうように月にのぞんでおり、月あかりはまた水が澄んだように、香りのよい花を照らしている。

この夜、杖を曳いて月下に花を尋ねて散歩し、酒を携えて花を前にし、月を見ながら杯を傾ける。

このような好い花、好い月を同時に見るということは、きわめて稀なことで、いつも見られるとは思ってはいけない。

【作者略伝】唐伯虎　一四七〇～一五二四

明時代に活躍した文人である。書画に巧みで祝允明・文徴明・徐禎卿と並んで「呉中四才子」と呼ばれた。名は寅、

字を伯虎又は子畏、六如居士・呉人と号した。父は唐公徳で、蘇州呉父県の繁華街で飲食店を営む。（客が多く繁昌していた。）

幼少から利発であり教育も受けることができた。

画は初め沈周臣（石田）に学び、早熟型でもあったため人々の注目を集めた。十六歳の時蘇州府学に入学、同年の文徴明と親友となる。文徴明の父文林も唐寅の才能を認め唐寅の名を広く宣伝してくれた。北宋より出た人としては当時第一の大家である。また李唐、李龍眠に習っている。山水・人物画に秀で、また詩も石田とともに有名。晩年郷里に桃花庵を設けて風流韻事をもっぱらとし、宋の院太画のほか、元末の絵を研究し、北宗画と南宗画を融合した山水画を生み出し、書画を売って生活した。画風は北宗院体派に属し、院派と呼ばれ「江山驟雨図」など傑作がある。著書には「唐伯虎集」4巻がある。

嘉靖二年（一五二四）五十四歳で没す。

【備　考】

この詩の構造は、平起こり七言律詩の形であって、下平声七陽韻の茫・長・香・嘗・常の字が使われている。恨・有・無・如の字を多用し、特に各句に月・花を配置しさらに他の律詩と異なる。

「花月吟」の題意に合わせたのだろうが規格外れである。

【鑑　賞】

画家としての唐伯虎は、師芸を継ぎ、超一流の画家として知られるが、奔放不羈（気性があけっぱなしで常軌を逸する）自由奔放な草書を得意とし、行動もそれに応じ、書画の揮毫料を金で謝礼されると、全部友達と飲んだ。家の門を一歩出るとすぐ借金とりに追いかけられたという。

この花月吟の詩も後のどの詩も伯虎ならではの詩で口ずさむとリズミカルな詩であり、また文字の使い方にも特徴がある。又自由奔放でありながら繊細なところが詩の中に感じられる。

この詩は構成吟で書道吟・茶道吟・華道吟の吟題として良く詠われる吟題である。

「花月吟」を菅茶山も之にならって花月吟二十律を作った。

【参　考】　唐伯虎の詩

散歩　　唐寅（伯虎）

呉王城裏柳成畦
斉女門前水拍堤
賣酒當壚人裊娜
落花流水路東西
平頭衣襪和鞋試

弄舌鉤輈繞樹啼
此是吾生行楽處
若為詩句不留題

散歩　唐寅（伯虎）

呉王の城裏　柳　畦を成し
斉女の門前　水　堤を拍つ
売酒　当壚　人　裊娜
落花　流水　路　東西
平頭衣襪　鞋に和して試み
弄舌の鉤輈　樹を繞って啼く
此は是れ　吾が生　行楽の処
若為か詩句もて　題を留めざる

【語句の意味】

当　壚　土を盛って一段高くなっている売り場
裊　娜　女性が若くてしなやかな様子
衣　襪　「衣」は服「襪」は足袋
鉤　輈　鉤輈は「鉤輈格磔」と四文字に表記することもあるが、鷓鴣の鳴き声
若　為　ここでは反語「是非とも詩によって自分の気持ちを残さないことがあろうか、いや残したい。」

【意　解】

呉王の城下町は蘇州の古い町で、越の国との長い間の戦いを思い出す。そこに「美女」は斉の国から来た娘。呉が斉を打ち破った時、斉から人質として若い娘が贈られて来て呉の王様はその娘を皇太子の后にする。后は故郷が忘れられず、毎日泣いて暮らして病気になった為、呉の町の北側に、斉の町の眺めることの出来る高楼を作り建物の門や、川の波が岸辺の土手を打ち付ける。そういう眺めで、后を慰めた。

一段高くなっている酒場、いい酒あるよ、いらっしゃいと、呼び売りするしなやかな女性。ひらひらと舞い散る花びらは、川の流れとともに東から西へとまっすぐ続いている。

自分の服装は普段着の着物と足袋その上にわら靴を履くいでたちで出かけた。頭上でおしゃべりな鷓鴣が、木のまわりを飛びながら鳴いている。

（私は、どこへも行かないよ、蘇州が大好きだ。）この城市こそは、我が人生にとってのびのび楽しく暮らす場所なのだ。是非自分で詩を作り自分の思いを詩にたくして留めたい。

―何とも、ゆったりした風情であるー

【参　考】

雪　　唐　寅（伯虎）

竹間凍雨密如麻
靜聽囲炉夜地茶
嘈雑錯疑蚕上葉
寒潮落盡蟹扒沙

雪　唐寅（伯虎）

竹間の凍雨密なること麻の如し
静かに聴いて炉を囲み　夜　茶を煮る
嘈雑　錯って疑ふ　蚕の　葉に上り
寒潮落ち尽くして　蟹の沙に扒ふかと

【語句の意味】

嘈　雑　かさかさいう音色の形容

【意　解】

竹むらに降る冷たい雨は、しっとりと細やかで麻糸のようだ。その雨音にじっと聴き入りながら、炉端で夜、茶を煮る。

やがて（雨音が変わって）、かさこそと乾いたような音になった。それで私は、ふと錯覚をしてしまった。あれは蚕の幼虫が桑の葉っぱにのぼっている音か、或るいは冬の潮がすっかり引いて、蟹がその後の砂浜を這っている音か。ー密にして繊細であるー

（冬の夜部屋の中で雨音を聴き、やがて雨粒の音色が変わる。それを聴き雪に変わったことを詩にしている。）

【参　考】―管茶山の花月吟―

花月吟

一春花月動相睽
何夜花梢見月棲
吟月遅花寒剪剪
坐花望月雨凄凄
月中私擬催花招
花上誰懸取月梯
願得花園常貯月
花朋月侶毎招携

花月吟　（第一首）　菅茶山

一春の花月　動もすれば相睽く
何れの夜か　花梢月の棲うを見ん
月に吟して　花を遅てば　寒剪剪
花に坐して月を望めば雨凄凄
月中私に擬す　花を催すの詔
花上誰か懸けん　月を取るの梯
願わくは　花園　常に月を貯え

花朋月侶毎に招携するを得ん

【意　解】

ひと春の間の花と月はともすれば、互いにそっぽを向いてしまう。いつの夜なのか、花の梢に月が憩うのを見るのは。

月に詩を詠いながら花が咲くのを待てば、さっと風が吹いて寒い。花の前に座って月を見上げれば、雨が降ってきて寒い。

月光の中で、私はこっそり花に咲くよう命令を下すふりをするから、花の上に、誰か月を取る梯子を掛けてくれないだろうか？

願わくば、花園に常に月を収めておき、花見の友も月見の友も、いつも一緒に招待したい。

【参　考】明代

約百年間続いた異民族支配の元時代の王朝を倒して一三六八年に明時代にしたのは、明の太祖朱元璋である。彼は南京を首都として国の基礎を固め、政治的には王位継承のトラブル、北虜南倭で、北から元の残党の侵入や、南は倭寇の海賊などの悩みはあった。文化的には陽明学の興隆をはじめ、天文学、数学、医学、農学、兵学、自然画、又、琵琶記、三国志演義、水滸伝、西遊記、金瓶梅等の小説、文学も盛んであった。詩人としては、高啓が秀で「水を渡り復水を渡り、花を看また花を見る」の「胡隠君を尋ぬ」は高啓の作品である。

代表詩人
高啓　丘濬　唐伯虎
李夢陽　李攀龍
王守仁　劉基　袁凱　王陽明等がある。


唐伯虎の画